

## 比抵抗構造と余震分布

2008年6月14日岩手・宮城内陸地震(M7.2)の震源域には、東北大学によって行われた広帯域MT法探査の3本の測線がある。それぞれの測線における2次元比抵抗断面に、測線近傍に発生した余震の震源を重ねた。どの測線においても、余震が高比抵抗域に発生していることがわかる。余震の震源は臨時観測のデータも用いて決めなおされたものを使用した(6月14日~17日と6月20日)。

図16。(右図)本震(☆),余震(○)の震央分布と3本の測線の位置。緑破線で測線を表し、■は測点。▲は第四紀火山、☆は地殻深部低周波地震活動域,赤線は活断層を表している。

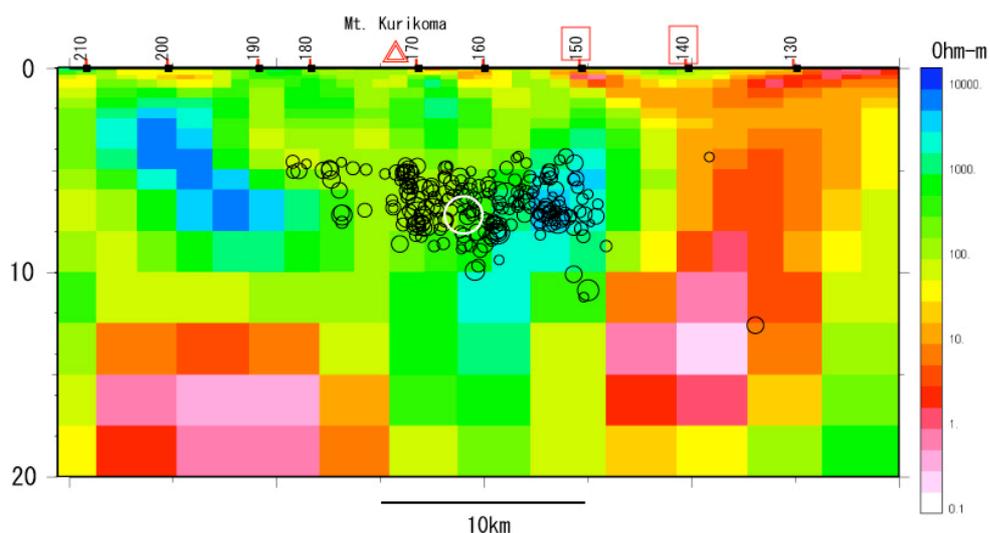
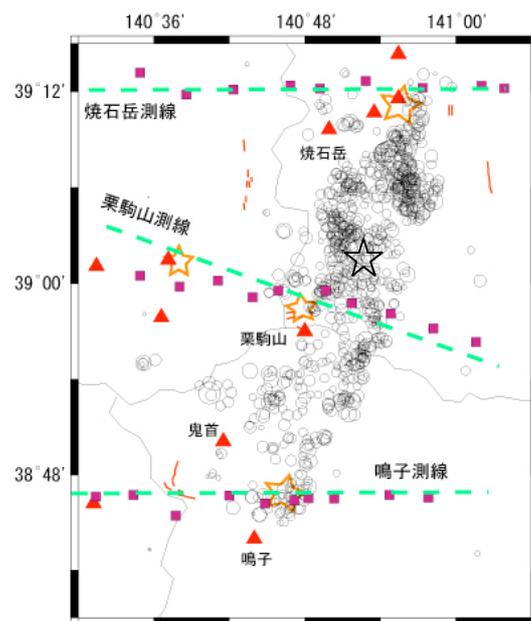


図17.本震震源に近い栗駒山測線。白丸が本震。測点140と150とでは、合同観測の一環として、2005年からの比抵抗変化を調べるためのMT観測を実施している。(参加機関:東北大学大学院理学研究科,秋田大学工学資源学部,北海道大学大学院理学研究院,東京大学地震研究所)

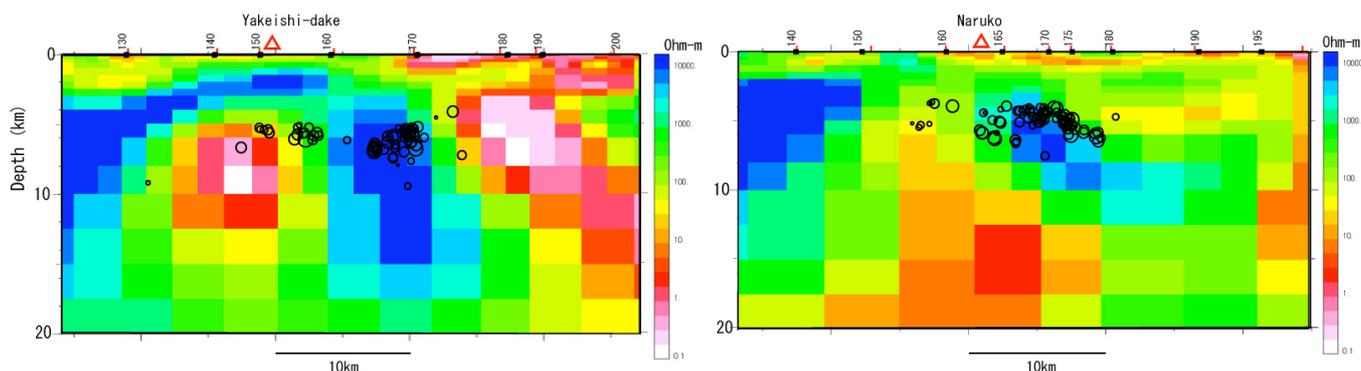


図18.余震域北端の焼石岳測線(左),余震域南端の鳴子測線(右)。